

「盗まれた手紙」奪還の思考プロセス

金子光茂

Dupin's Way of Thinking for the Purpose of Retrieving the Purloined Letter

KANEKO, Mitsushige

大分大学教育福祉科学部研究紀要 第36巻第1号

2014年4月 別刷

Reprinted From

THE RESEARCH BULLETIN OF THE FACULTY OF

EDUCATION AND WELFARE SCIENCE,

OITA UNIVERSITY

Vol. 36, No. 1, April 2014

OITA, JAPAN

「盗まれた手紙」 奪還の思考プロセス

金子 光 茂*

【要 旨】 本稿では、探偵デュパンの事件解決を支えたものは持ち前の分析的知性の力であったことを明らかにする。

この知性は、構造主義の知見に通底する。ある人間の思考様式は、その人間が育った社会の思考枠に強く束縛されているので、その枠を超えた自由な物の考え方はむずかしく、かなり限定的な思考に留まる。したがって自分の属する社会が許容する範囲内での思考様式から脱することができず、いきおい、無思慮に自分の思考を他の社会の思考にも適用してしまう、というのが構造主義の知見である。

この悪癖が警視総監の捜査のつまずきのもとだとデュパンは見抜く。自分の思考も犯人の思考も同じだと見なしたところに総監の誤謬があった。

そういう理解のもとにデュパンは、生来の系統的で数学者的な頭脳と固有の分析的な知性とを駆使して事件解決に漕ぎ着けることができた、というのが本論の結論である。

【キーワード】 E. A. ポー 盗まれた手紙 分析的思考 構造主義

I

世に探偵小説を初めて登場させたポー (E. A. Poe 1809-49) の作品に『盗まれた手紙』 (“The Purloined Letter” 1843 年作) がある。1844 年に世に出たこの作品は、世人が思いつかない分析によって問題を解決する主人公デュパンの活躍を描いている。事件の解決を可能にしたのは、ひとえにデュパンの分析的思考ゆえであった。この分析的思考とは何か、そして分析的思考を可能ならしめた思考プロセスとは何かを考察するのが本論の狙いである。

この作品には、パリ生まれの精神科医ジャック・ラカン (Jacques Lacan) によって、精神分析学的解釈が試みられている。ラカンが論文集『エクリ』の冒頭に置いた『盗まれた手紙』についてのセミナー⁽¹⁾は、フロイトの『快樂原則の彼岸』の注解を試みたものであるが、まずは、その精緻な精神分析学的解釈を見てみよう。

ラカンは、ポーの『盗まれた手紙』には3つの視線が存在する、と言う。

平成 25 年 10 月 17 日受理

*かねこ・みつしげ 大分大学教育福祉科学部言語教育講座 (アメリカ文学)

- 1) 第1の視線---何も見ていない視線（国王と警察）
- 2) 第2の視線---第1の視線は何も見ていないので、自分が隠しているものは見られていないと思いをしている視線（后、次には大臣）
- 3) 第3の視線---入手したいと欲する者の目に見えないよう隠すべき物なのにむき出しで放置している張本人は上の1)と2)の視線だと分かっている視線（大臣、最終的にはデュパン）

この3つの視線が1)から3)へ順に移動してゆくにつれて、盗まれた時点から盗み返される時点まで、同じ動作を重ねながらプロットは進展する。国王が見落とした第1の視線を警視総監が演じ、后が見られていないと思いをした第2の視線を大臣が演じ、大臣がむき出しで放置している張本人がこの人物だと分かっている第3の視線をデュパンが演じる、という具合に一部オーバーラップしながら、同一の動作がくり返される、とラカン考える。

そういう同じ動作が順繰りにくり返される。つまり、反復がある。ここに「反復脅迫 (repetition automatism = Wiederholungszwang)」が認められる。手紙は抑圧として機能し、抑圧されたものは「反復行為 (repetitive action)」となって回帰するので、手紙を手にした后や大臣は同じ動作を反復してしまうのだ、とラカンは言う。

だが、最後に手紙を手にしたデュパンの身に「反復脅迫」が起こらないのは、デュパンが、手紙と貨幣は同質のものだと熟知していた、⁽²⁾がゆえに、さっさと手紙を警視総監が振り出した5万フランの小切手と交換してしまうからだ、と補足するのが内田樹氏である。なるほど、炯眼あふれる補足である。

続けて、さらに「わたしを読んではならない」というのが『盗まれた手紙』の発信するメッセージである⁽³⁾とするが、これは内田氏の推断である。残念ながら、作品にそういう記述はない。手紙は「所有することで持主に力を与えるが、使えば効力を失う」⁽⁴⁾と書かれているだけである。

ともあれ、ラカンの『エクリ』の冒頭をかざる『盗まれた手紙』の解説は、フロイトの快樂原則の注釈としてあらわされたもので、「反復脅迫」の症候にしばっての解説をねらいとしている。フロイト理論には、その立論を否定することができるような、反証可能性が無い、とはよく言われることだが、それは「反復脅迫」についてもあてはまる。登場人物がみな一律に「反復脅迫」の症候を呈しているとは読みがたいからである。こういう事情から、「反復脅迫」の症候についてだけは本論ではひとまず留保して論をすすめても、ラカンの知的威信を砕くことにはならないだろうと信ずる。

したがって、ラカンの言う3つの視線の存在はしっかり踏まえつつデュパンの問題解決能力を支える基盤をさぐり、「分析的思考」について考察しながら、盗まれた手紙の発見につなげたデュパンの手紙奪還の思考プロセスを分析してみたい。

II

探偵小説の生みの親 E. A. ポーが世に出した傑作『盗まれた手紙』のあらすじは、こうである。

十九世紀のある年の秋のパリはサンジェルマン住宅街。ここに居を構える探偵デュパンをパリの警視総監G氏が訪ねて来る。いま公務でかかえている面倒な事件のことでデュパンに相談したいという用向きから物語が始まる。

事件は、宮殿内の閨房で王妃と思しい人物が手紙を一通受け取ったことに端を発する。折しもそこへ国王が入ってくる。王妃は読むのを中断して手紙を引き出しにしまおうとするが果たせない。手紙は、あわてて、文面は見えないが宛て名が上になって誰にも見えるかたちで卓上に置かれた。

さいわい手紙は国王に気づかれずに済んだ。が、そこにD大臣が入ってくる。大臣は王妃の狼狽ぶりを見て取り、秘め事を察知する。そしていつものように用向きをすばやく済ますと、卓上に置かれた手紙と見た目がよく似た手紙を取り出し、それを読むふりをしながら、自分の手紙を王妃の手紙のかたわらに置く。再び事務的な話をしたあと大臣は、素早く手紙をすりかえて閨房を立ち去る。

王妃はこれをつぶさに見ていた。が、夫である国王がそばにいたために、大臣が手紙を盗むのを制止できなかった。この手紙は、持主が内容を公開しないでただ所有し続けることによって強大な権力を発揮できる神通力を有するという代物である。

ひそかに手紙を取りかえすよう王妃に依頼を受けた警視総監は大臣の家と敷地を大臣に気づかれることなく何度も徹底的に搜索する。だが手紙は出てこない。大臣が今もそれを所有していることは、状況からして間違いない。

それから1ヵ月後、警視総監は探偵デュパンに手紙の取得を依頼しに来る。盗まれた手紙を奪還する試みも万策尽きたからである。手紙を取り戻すためには大金を支払っても惜しくはない、と言う。それでは早速とばかりに、デュパンは警視総監にその場で礼金5万フランの小切手を書かせる。言われるままに小切手を書いて差し出すと、即座に、それと引き替えに、盗まれた手紙を警視総監に渡す。

あれほどの徹底的の捜査で見つけられなかった手紙をこともなげに手渡された警視総監は驚愕し一言も発しないままデュパンのもとを去る。

警視総監が去ると、名探偵デュパンは友人でありこの物語の語り手でもある「私」に事の次第を次のように説明する。

ある日の朝、デュパンはふらりと大臣の屋敷を訪ねた。大臣は退屈をもてあましているという風情でデュパンを迎え入れる。デュパンは視力が弱いという口実を設けてこの日のために用意した緑のメガネをかけて大臣にあやまれることなく、話に熱中する間ずっと、入念に部屋を観察した。

そしてついに暖炉の中央からぶら下がるみすばらしい状差しが目に止まった。捨てるほかないという形状で無造作に突っ込んである擦り切れた手紙をそこに見つけたのである。

その翌日、わざと置き忘れてきた嗅ぎタバコ入れを取りに再び大臣邸を訪ねる。二人が前日の話に熱中していると、その部屋の真下で銃声が轟き悲鳴が上がる。大臣は飛んで行って窓を開け、通りを見下ろす。そのすきにデュパンは用意していた偽物を「盗まれた手紙」とすり替え、暇乞いして大臣邸を辞す。窓下の通りの銃声は、デュパンが雇った男によるもので、打ち合わせどおりの騒ぎを起こしてくれたのだった。

ここまでの事の推移に、デュパンが語る「丁半博打に長じた少年」と「地図で遊ぶ謎解きゲ

ーム」のエピソードを挿入すれば、作品のあらすじは、ほぼ完成である。

III

探偵小説では「警察の通常の捜査方法が頓挫をきたすと、名探偵が登場し、どういう独自の方法で犯罪を解決してみせるか、その手法が問題となる」⁽⁵⁾とは、世のすべての探偵小説の醍醐味とは何かを言っているのけたヴィンセント・ブラネッリの至言である。さらに続けて、ブラネッリは、この作品におけるデュパン独自の手法は「彼[デュパン]の分析(*his* “analysis”）」⁽⁶⁾に負う所が多い、と指摘する。

じっさい、作品を理解するには、人間を分析的知性の持主と非分析的知性の持主とに分けると話がはやい。分析的知性の持主としては、「丁半博打に長じた少年」が事例となる。非分析的知性の持主には警視總監(以下、總監と略称する)があてはまる。

丁半博打に長じた少年によると、相手が丁と半を交替でくり出す馬鹿者であるか、それとも同じ目を出し続けるやや高いレベルの馬鹿者であるかを見極める。いずれの場合であれ、「自分の表情をできるだけぴったりと相手の顔の表情に合わせる」(p. 15)のが秘訣だ、と言う。

この手法は人間の表情という外部構造をそっくりにつくり出すことでその外部構造から内部構造に遡及して心の動きをさぐり当てようとする方策である。

たとえば、これは日本人による観察であるが、ある人間が嘘をついているか否かは、それを口にしている時のその人の目が左右どちらを向くかで判定できる、という。なぜなら、その人が嘘をつくときの視線は右か左かのどちらかに癖として固定しているからだという。⁽⁷⁾鋭い観察力である。

嘘をつくときの当人が左右のどちらに目を泳がせるかは、きちんと決まっている。となると、心の動きは内から外へ目の表情となって噴出する癖があるのだから、その噴出した表情を分析すればよい。表情に現れた心の動きを目の向きで察知する手法である。

丁半博打に長じた少年の洞察力に関しても、原理は同じである。外に現れた相手の表情とぴったりの表情を自分の表情にそっくりにつくり出すことによって、内部の心の動きをリアルタイムで知ろうという寸法だ。外部構造に基づいて内部構造に行き着き、心の動きを読む、という分析的方法である。少年が採る分析法は、自己中心的分析ではなく、相手を中心に据えた(地動說的)分析の手法だと言えよう。

他方、非分析的知性の代表は自己を分析の中心に据える(天動說的)分析手法をとる点に特徴がある。「隠された物を探索する際に、自分たちだったらこうするという隠し方にしか注意を向けない」(p. 16)ところが總監の分析法の特色である。相手ではなく自分を中心基軸に据えた分析法であり、これを「非分析的知性」と呼ぶことができる。

なぜなら、「非分析的知性とは、自分の基準を相手に無思慮に適用することである」⁽⁸⁾が、自分の考えが相手の考えと寸分の違いもないという自分勝手な判断に固執したもので、これでは相手の心を分析することなど不可能だからだ。頭のいいわたしの思考に誤りはないので、わたしの思考を円の中心として、他人の頭の中も同じように回っているはずだとする天動說的解釈は、非理知的である。わたしの思考に誤りはないと自認する推断は、自分が考えているとおりに他の人間も考えているだろうという、根拠のない論理構造である。我田引水型のこの思考回路には、知的分析力の片鱗すら見えない。

次に紹介されるのが「地図で遊ぶ謎解きゲーム」である。地図の中に記された任意の名称を言って、それがどこにあるかを相手に当てさせるゲームである。

素人はできるだけ小さな文字で書かれた名称を選んで相手を困らせようとする。が、これではゲームに勝てない。

逆に玄人や達人は、地図の左右両面に広がるような大きな文字で印刷されている名称を選ぶ。小さな文字で書かれた見にくい名称を相手は聞いてくると予想しているものだから、素人は看板みたいに大きな文字で書かれた名称が当てられない。

このゲームの、相手を出し抜くトリックにヒントを得て、分析的に大臣の心の構造を読み解き、手紙の隠し場所を発見しおおせたのがデュパンの真骨頂であった。大臣は人をだますトリックをうまく使ってパリ警察と總監を、まんまと、出し抜いているに違いない、とデュパンは踏んだのだ。緑のメガネを買い込むと、大臣邸を訪れ、見事な話術で大臣を話のとりこにしながら、たつぷりと時間をかけて、メガネの奥から手紙の隠し場所の発見につとめたのだった。

總監の長期にわたる徹底的捜査をもってしても見つからなかった「盗まれた手紙」は、ナント、これ見よがしに最も人目につく暖炉の前にぶら下がる状差しに無造作に突っ込まれていた。

デュパンの分析的知性は、直接的には「地図で遊ぶ謎解きゲーム」を応用したものであるが、その背後には人間の思考は、その人間が属する社会が醸成する思考構造の枠内に限定されたものでしかない、という知見を基礎としている。この知見があつてこそ、デュパンは「盗まれた手紙」を発見し得たと言うことができる。

IV

手紙発見につながったのは、デュパンの分析的思考を支える知見が背景にあつたからである。それなくしては、発見は無理だったろう。一口で言うと、デュパンを支えたものは、構造主義的知見であつた。

知見の正体を知るには、どうしても構造主義について触れておかねばならない。構造主義の理説はこうである。

人間はどの時代に生まれ落ちてもその時代の空気を吸い、その地域に生き、その社会に帰属して生きる。このことによって物の見方は基本的なところで特有のかたちをつくって人間にまといつき、帰属する社会が独自につくり出す独特の様式を帯びる。個人の考え方や行動様式は、その個人を主体として顕在化したものではなく、個人が帰属する社会が集団的共時的につくり出した思想や行動様式をほぼ踏襲したものにはかならない。

だから個人は自分が思っているほど自由な発想や思想をもって行動しているわけではなく、ものの見方も振舞いも自分が思っているほど主体的ではない。自分が「属する社会集団が受け入れたものだけを選択的に」^⑨見せられ、感じさせられ、考えさせられている。帰属する社会集団が排除してしまったものは、最初から私たちの五感に触れることはないので、感受することすらできないし、はなから思索の対象にすらならない。

人間は誰しも自分を自律的な主体として認識し行動していると思つているが、実は帰属する社会集団に左右されており、各人の主体性はかなり限定的なものでしかない。この事実を倦むことなく探求して徹底的に掘り下げ方法論として確立したのがレヴィ=ストロース(Claude Levi-Strauss 1908-2009)の構造主義という学問体系である。帰属する社会集団によつてもの

の見方が変わる、という構造主義の観点に立つと、2つの社会集団があればそれぞれ生活のあり方や価値観や世間の見え方に決定的な違いが出る、というのが「構造主義」の到達した知見であり、功績なのだ。

では、この構造主義の知見によりかかって物語を見てみよう。総監の捜査方法は、警察社会がこれまでの捜査経験と成功に裏打ちされた完璧な捜査方法だったと言える。なぜなら、犯人逮捕や盗品発見にかけては、経験的にもデータの的にもこれまで最も効率的な捜査方法であったはずであり、非の打ちどころはなかったはずだからである。(これはデュパンも全面的に認めるところである。)

だのに盗まれた手紙が発見できない。それゆえ、何度も同じ捜査をくりかえすほか、家具の脚の空洞に隠されてはいないか、家具を分解し、クッションの中に丸められていないか針でさぐり、さらには拡大鏡や屋敷の図面まで使って大臣の邸宅および屋敷の敷地の敷石にいたるまで、風潰しに捜査する。それでも出てこない。

パリ警察とこれを率いる総監は、当時の社会が望み得る最先端の技術と知力を尽くした捜査能力を持った近代警察の最強集団だと考えられる。

つまり、知力においても技術においても、捜査能力は、過去のどの時代にも劣らぬ最優秀の警察であることに疑いの余地はない。だから総監は、必ず盗まれた手紙は見つけられるという自信を示した。ところが大臣の留守中の屋敷捜査では不如意な結果となり、自信は脆くもくずれる。「これほど意気消沈し、しょげかえっている総監の姿を見たのはこれが初めてだった」(p. 13) と記す語り手のことばに総監の自信喪失の深刻さが伝わってくる。

自信家の総監でも万策尽きたつまずきは、近代ヨーロッパ人の思考の躓きと軌を一にする、と言っても過言ではない。

総監と同様、ヨーロッパ人は誰しも、自分たちの世界観は正しく、学問的質と高尚さの点からも、思考プロセスの正確さはゆるぎないものと自認していた。近代の西欧文明こそは、人類が手にすることのできた前人未到の高みを誇る最高水準にあることを疑わなかった。このようなヨーロッパ社会を席捲する支配的な思考構造が、当然のことながら、総監のものの考え方に入り込み、その思考構造の基軸を成していたことは間違いない。

近代ヨーロッパを支配するこのような思考構造では、人類史上で人間が到達した最高のものが西洋文明であると夜郎自大になるがゆえに、自分たちと比べると新石器時代のような生活を送る今日の未開人は評価の対象にすらならない。近代ヨーロッパ人の目からすると、古来、他の人間と接触したこともないアマゾンその他の未開人は、人類発展の歴史から大きく取り残された新石器時代人としてしか見えない。

新石器時代人は近代ヨーロッパ人と比べてそれほどまでに劣るのだろうか。本論の立論上この問題は、ぜひともここで詳述しておく必要がある。

新石器時代といっても地域によって時代がやや異なるので、文字を手にして以降の近代ヨーロッパ成立までの時代とプロト新石器時代とを比べてみるのが公平を期すことになるだろう。

プロト新石器時代は、紀元前 11000 年頃から紀元前 8500 年頃まで、約 2500 年間の歴史をもつ。この時代に新石器時代人は寒さと飢えに対策を講じた。その結果、人類の安泰を確保するのに不可欠なものの殆んどをこの時代に手中にできた。しかもこれが文字なしの時代に成し遂げられた事は、銘記すべき特筆事項である。

なぜなら、西欧世界は文字の発明から今日の近代科学の誕生まで約 5000 年もの長い年数を

経てきたが、新石器時代ほどの急激な進歩は遂げていないからである。その一例として「ギリシャ・ローマの市民の生活範囲と、十八世紀ヨーロッパのブルジョワの生活範囲との間に大した相異がない」⁽¹⁰⁾ことを挙げれば事足りる。要するに、西欧社会成立までにかかった年月と新石器時代の発展に費やされた年月とを比較すると、新石器時代に人類は、信じられないほど長足の進歩を遂げたということだ。つまり、新石器時代人は「文字の助けなくして、巨歩の前進を成し遂げた」⁽¹¹⁾わけである。

アメリカ原住民（インディアン）が文字を持たなかったとか、新石器時代の人々が文字を知らなかったことをあげつらって、無文字文化の新石器時代人を現代西洋人よりも劣る、と言いつるのは不当である。こののち人類が寒さと飢えを凌ぐ術を手中にできるようになったのは、くり返して強調すると、この新石器時代人の発見の賜物である。しかもこの飛躍は、無文字文化のもとに成し遂げられた。

文字を知ってから今日の西洋世界へと進歩を遂げるのに 5000 年もの年月を閲したのに対し、そのわずか半分の 2500 年で、新石器時代人はその後、人類が飢えや寒さを凌ぐ対策をみ出した。この違いは大きい。文字をもっていたか文字をもっていなかったかは問題ではない。文字を有する西欧人が、文字文化を有する構造枠内だけで思考をめぐらし、今日人類にまで継承されてきた新石器時代人の発見遺産やその文化を劣等だ、などと判定するのは決して真理ではない。文字の有無を判断の基準として人類の進歩の歴史をとらえた思い込みに過ぎない。分析的思考にはほど遠く、非分析的思考でしかないのはもちろんである。

同じことをレヴィ=ストロースのことばを借りて言うなら、「自分の社会の中だけで行動していれば、その他の社会の理解はできない」⁽¹²⁾ということだ。人類の発展の最先端を行くと自認する人びとにとって、社会構造の枠内に踏みとどまって限定的な思考をくりかえす限り、分析的思考は決して生まれ得ないと言うことができる。

V

自分の社会の中だけで行動し思考しているがゆえに、自分と異なる社会の思考には理解が及ばない端的な事例は、最初の訪問のとき総監がデュパンを評して、「ほらね、そういう変わった考え方をする人間なんだよ、君は」(p. 7) ということばに集約される。

この人物評は、「よくよく考える必要がある大事な」相談事であるからにはランプを点けずに「暗闇の中で考えをめぐらすことにしよう」(p. 7) と言ったデュパンの提言に対して、総監が発したことばである。やりとりをそばで聞いていた語り手は、「自分の理解を超えるものがあると悉く『変わった』という呼称を付ける癖が」総監にはある (p. 7) と指摘する。正鵠を射た指摘である。

パリにおいては、総監もデュパンも頭脳明晰だという点では共通している。だが思考が分析的であるか非分析的であるかにおいて歴然たる違いがあることは、すでに述べたとおりである。

パリあるいはパリ警察という社会の中だけで行動し思考して事件解決に力を発揮してきたであろう総監は、自らのその思考パターンを自家葉籠中の物とするのが習性となっていると考えられる。だからデュパンに向かって「そういう変わった考え方をする人間なんだよ、君は」という寸評が口をついて出る。自分が生きてきた社会の思考を分析の礎とするので、それから少しでも違う人間の思考に理解が及ばないのだ。

これまで生きてきた社会が醸成した思考方法に則った十分に完璧な捜査が完了すれば、屋敷と敷地内に「盗まれた手紙」は存在しない、と信じ込ませることができる。それを狙って大臣は、夜分、わざと屋敷を留守にして、総監の思う存分な捜査を許した。これを見抜いたデュパンは、これによって、通常の間人が思いつくような、ごく目立たない場所に手紙が秘匿されているのではない、という確信を得る。そうなると、残る秘匿場所は人目につく目立つところしかない、ということになる。これが、デュパンが得た分析的思考の結論である。

分析的思考とは、「現象を成り立たせている要因をすべて摘出し、それらの組み合わせから、元の現象をつくりだす、つまり、再現するという、現在の表現を用いるならば分析的・解析的な方法」をいう。⁽¹³⁾これは、科学という学問研究における分析的方法とは何かを定義したものが、ここにいう「現象」を「手紙の盗難」に置き換えて読めば、作品解釈を一挙にすすめることになる。

すなわち、「手紙の盗難」を成り立たせている要因をすべて摘出し、それらの組み合わせから、元の「手紙の盗難」をつくりだす、つまり、再現するという、現在の表現を用いるならば分析的・解析的な方法を》行なったというのが『盗まれた手紙』の全貌だ、と解釈できる。

同じことを、もっと簡明なことばで、一口に言うなら、「手紙の盗難」を成り立たせている要因をすべて摘出し、元の「手紙の盗難」を再現すること》である。

ここにおける「手紙の盗難」を成立させる要因は何かというと、次の3つである。

- 1) 予期しない人物が不意に現場を訪れる。
- 2) その現場に入手を渴望する品物が入目につくむき出し状態で置かれている。
- 3) 予期しない訪問者は入手を渴望する品物とすり替えが可能によく似た偽物を所持している。

『盗まれた手紙』において、宮殿内の閨房で「手紙の盗難」があったのは1) 予期しない訪問者[大臣]が不意に現場[閨房の机の周り]を訪れ、2) その現場に入手を渴望する品物[手紙]が入目につくむき出し状態で置かれており、3) 予期しない訪問者[大臣]は入手を渴望する品物[手紙]とすり替えが可能によく似た偽物[にせの手紙]を懐中に所持していて、それを本物とすり替える。

以上の要因を分析したデュパンは、1) ある日の朝、大臣の予期しない訪問客[デュパン]となつて不意に現場[大臣の執務室]を訪れ、2) その現場に入手を渴望する品物[手紙]が無造作に入目につくかたちのむき出し状態で置かれているのを見つけたが、あいにくよく似た偽物の持ち合わせがなかったために、3) 再来が予期されない訪問者[デュパン]は、その翌日にわざと忘れた嗅ぎタバコ入れを取りに、偽物[自作のにせ手紙]を所持して現場[大臣の執務室]を訪れ、騒ぎに乗じて、本物とすり替える。

このように、「現象」を成り立たせている要因をすべて摘出し、元の「現象」を再現する」という手順を踏んでデュパンは手紙を取り戻す。この盗まれた手紙の奪還は、科学の分析的方法を使って行なわれたわけだが、それを可能にしたのはデュパンの分析的知性であった。

この分析的知性を支える思考基盤は、パリ社会に生きる自分たちの基準を相手に無思慮に適用する狭小な「文明人の思考」とは別の思考（たとえば「未開人の思考」）もこの世にはあり得ることを考える思考の余裕にある。言うなれば、「未開人の思考」と「文明人の思考」の違いは「発展段階の差ではなく、そもそも『別の思考』なのであり、比較して論じること自体無意味である」⁽¹⁴⁾という知見であった。

手紙を盗んだ大臣も、盗まれた手紙を取り戻そうとする総監も、ともに文明人にはちがいない。だが、両者は、「未開人の思考」と「文明人の思考」ほどに思考プロセスが乖離していることを構造主義的観点から見抜いたデュパンの知性が事件の解決をもたらした、と言うことができる。

注

- 1) Jacques Lacan, “Jacques Lacan, Seminar on “The Purloined Letter,”” trans. Jeffrey Mehlman in *The Purloined Poe: Lacan, Derrida, and Psychoanalytic Reading*, ed. John P. Muller and William J. Richardson (Baltimore and London: Johns Hopkins UP, 1988) 28-54. 以下、ラカンからの参照はすべてこの英訳版に拠る。訳文は筆者。
- 2) See 難波江和英・内田樹『現代思想のパフォーマンス』(2004; 東京: 光文社, 2010) 312-33.
- 3) Ibid., 309.
- 4) Edgar Allan Poe, “The Purloined Letter,” ed. Thomas Ollive Mabbott in J. P. Muller and W. J. Richardson, ed., *The Purloined Poe* (Johns Hopkins UP, 1988) 9. 作品からの引用はすべてこの版に拠り、以後、引用は本文中に (p. 9) のように表示する。訳文は筆者。
- 5) Vincent Buranelli, *Edgar Allan Poe* (New York: Twayne Publishers, Inc., 1961) 84.
- 6) Ibid.
- 7) 内田樹・釈徹宗『現代霊性論』(東京: 講談社文庫, 2013) 82-83.
- 8) 『現代思想のパフォーマンス』288.
- 9) 内田樹『寝ながら学べる構造主義』(2002; 東京: 文春新書, 2010) 25.
- 10) クロード・レヴィ=ストロース著室淳介訳『悲しき南回帰線 (下巻)』(1985; 東京: 講談社学術文庫, 2009) 172.
- 11) Ibid.
- 12) 『悲しき南回帰線 (下巻)』314.
- 13) 桜井邦明『天文学をつくった巨人たち: 宇宙像の革新史』(東京: 中公新書, 2011) 31.
- 14) 『寝ながら学べる構造主義』146.

参考文献

- レヴィ=ストロース, クロード. 『悲しき南回帰線 (上巻)』 1955. Trans. 室淳介. 1985; 東京: 講談社学術文庫, 2008.
- レヴィ=ストロース, クロード. 『野生の思考』 1962. Trans. 大橋保夫. 1976; 東京: みすず書房, 2009.

Dupin's Way of Thinking for the Purpose of Retrieving the Purloined Letter

KANEKO, Mitsushige

Abstract

This paper is to make it clear that Dupin finally solves the crime, making the most of his own analytical way of thinking.

According to the findings of structuralism, there is nothing to choose between two cultures. More importantly, there is little to choose between “pensee sauvage” and civilized people’s “pensee” or thinking.

Even so, a particular way of thinking is part of one group’s norm, but not another group’s norm. One group has an ethnocentric view towards another group, and vice versa. The same can be said of the difference in the way of thinking between the Paris police, or the Prefect, and the Minister, or the thief of the letter.

Analyzing those two different ways of thinking on the basis of the theoretical framework of structuralism, Dupin manages to solve one of the most difficult conundrums for the Prefect. The success is due to Dupin’s idiosyncrasies in that he is methodical, analytical and perfectionistic to the point of being very mathematically inclined.

【Key words】 E. A. Poe, The Purloined Letter, analytical thinking, structuralism